



# おちほ

第57号 平成19年3月1日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一

2007

☁️  
☁️  
☁️  
すごせます  
ように!!



今年も健康に



☆ 一年に一度のぜいたく三昧

☆ あけましておめでとーございませう。今年一年の始まりはとても良いお天気で、素敵な一年になりそうな予感がします。

元旦ということでもいつもよりやや遅めの朝食には、お炊事の方が作って下さったお雑煮をいただきました。例年よりちよっぴり多めの方が寮に残っておられたのでお正月という雰囲気は全くしない元旦でした。

昨年引き続き、徒歩で初詣に行きました。皆さんは一体何を願いましたか？手を合わせながら微笑んでおられる寮生さんもおられました。私は皆さんを代表して『健康にすごせますように!!』としっかりとお願いしておきました。

初詣の他にも買い物外出をしておいしいケーキやご飯を購入して食べたり、夕食は皆で焼肉と幸せいっぱいとお腹もいっぱいなお正月でした。

今年も一年楽しく、健康に過ごしましょうね☆



# 教育現場の間違った三つの流行とは

理事長 高井正義

近年の報道機関からは、これまではあまり公にならなかった家庭や学校におけるいじめや虐待、暴力等の問題事件が連日のように報道され、関係者や識者からの状況、意見等が述べられています。

最近、ある雑誌のなかに皇太子殿下の恩師で、学習院名誉教授の川嶋氏による「子供を大事に育てよう」という講演の概要を読む機会がありました。学習院幼年の保護者を対象に、いま教育界で流行っている三つの「怪しげな言葉」に惑わされては

いけない。という内容で、その三つの言葉とは

- ①子供の「個性」を大事にしよう
- ②親の「価値観」を子供に押しつけるな
- ③初めから教えず、子供の「思考力」を尊重しよう

ということを例題として、

「三つとも格好のいい言葉ばかりだが、そんな理由では子供は育たない。大人だって自分の個性がわからないのに、子供の個性を見抜くことはできない。価値観だって『こういう人間になってほしい』という思いで、親が善いことと悪いことをはっきり子供に押しつけることができなければ駄目。また思考力といっても、子供の頭や心に材料がない状態で考えろ、といっても無理。

そんな出来ないことをやるうとするのではなく、まずは「道徳心」と「基礎学力」を徹底的に教え込みなさい。そのためには9才頃までは特に

躾を厳しくしなければいけない。普段は愛情たっぷりに接してあげながら、時には顔を真っ赤にして叱らなければいけないことがある。「叱るのはいいけど怒っちゃいけない」なんでもっともらしいことを言う人もいるが、親が子供を叱るときは、感情をいっぱい見せて怒らなきゃいけない。怒りを抑えて論ずるようなニヒルな教育では子供に伝わらない。少子化の時代で、子供が「若君様」か「お姫様」のように扱われ、保護者はまるで「家来」のような傾向が見られる。親が権威を回復して、この関係を正さなければいけない。」と記述されていました。

このことに関連して、ある識者の方から「ついこの前まで、米国の有名な学者などが唱えていた『子供の判断力は高く、教師はそれを信じて「教育」ではなく「支援」や「援助」に徹するべき』という理想的で、耳触りのよい欧米流の教育論がもてはやされましたが、実際の教育現場ではそれでは通用しないことがやっとな認識されてきたように思う。」と評記されていました。

正常な人間の言動は内面（思考）から発するものですが、思考の未熟な幼児には外面（形）から教育することの必要性を前期で述べられていたと思います

が、このことは自分の言動を内面から発することが苦手な知的障害の人、特に精神年齢が低い障害の重い人の場合にも同じことが考えられるのではないのでしょうか。問題行動の激しい人には、少しでも常識のある言動を認識して貰い、周囲の人と協調して円滑な生活をして貰えるよう、外面から教えてあげることが必要ではないでしょうか。勿論、身体を痛めたり傷つけたりする体罰は論外だが、「良いことは良い」「悪いことは悪い」と評価し、保護者でなくてもその人に係わる人が、愛情を持った「厳しい姿勢」で接することが大切ではないでしょうか。このようなことを川嶋優先生の講演記事から感じました。

# しよかん

# 名にし負はば

寮長 山下陽一

## 東京での「土と色展」

昨年(二〇〇六年)十一月十五日から五日間、世田谷美術館で「第十一回土と色―ひびきあう世界―世田谷展」を開催して、既に二ヶ月余が過ぎてしまいました。終了後もいろいろ意見感想が寄せられていますが、今この展覧会の図録報告集を作成しようと準備しているところです。

同名の展覧会を京都市美術館で開催したのが同年の二月でした。京都展の時にも問題になった事の一つとして、作者の名札を付けるか否かの論議でした。これを十分に尽くせぬまま名札なしの展示構成となりましたが、東京展においてもご覧いただいた方々の中からもこの問題が指摘されました。

## 「名札」の要不要

京都展の時もそうでしたが、私は作者名をはっきり明示しなければならぬと考えています。

土と色展を開催するに当たって以前からあったのですが「名前などにこだわらず作品を見てほしい」というのが名札不要論の根拠の一つとなっています。名前が作品の理解を曇らせているといっているわけではないのでしようが、この名札問題を考えていく場合、名札の要不要の両者の立脚点、論議の軸足が明確になっているのだろうかという疑問です。そこを明らかにしてお

かないと、A説とB説はそれぞれの主張の平行線で終わってしまうのではないかと思います。

## 「果実を生み出す植物のように」

「土と色」の作品それぞれは、私は「生の芸術」ということばが一番近い表現ではないかと思っています。展覧会のサブタイトルを「アート時間軸の原点」としたのですがこれは発達障害があることで、人の思考の根っこ(Primitive)に近いところから出発しているのではないかという思いからです。その点では歴史的人為的な介入の少ない自然そのものに近い表現を見ることができるとは思いません。まるで人類の出発点に位置するような世界だからこそあらゆるエネルギーに満ちあふれているのではないか。それが現代の私たちに、興味をかきたて魅了させているのではないか、そのような考えからです。

名札についてこの観点から考えていくと自然人としての作品創りに個人名はあまり意味を持ちません。だいたいの名前にどれほどの実態を封入できるのかということの問題にしたとき、バラの名はどんな名前をつけようともバラはバラで、それらの持っている自然の要素を全て包み込むにはその名前だけではあまりにも含む意味を伝えられないことが多すぎて、「作品の前に黙して立つ」ことはおそらく、自然に寄って立つならばこの主張は非常に説得力があると思います。

## 文明の成果物としての位置づけ

しかし、作者たちははたしてそれほ

ど牧歌的なところで生活を送っているのだろうかと考えたとき、今の現実を考慮せざるを得ないのではないかと、思います。

少し前、黒マグロの漁獲高が抑制され価格上昇があるだろうということがニュースになっておりましたが、海中にいる自然そのものの黒マグロには名前は知りません。これと同じことが人間の世界に今でもあります。アメリカでは一九六〇年代だと思いますが、黒人差別が世界に暴露され、その時以来障害者・少数民族・移民などにも差別が存在するということを知ったのではないかと。

白人社会や優位に立つ者にとつての常識におおきな疑問が投げかけられた時期と同じくします。

それぞれの作品に作者の名前をつけることについては、個人という概念に触れなければなりません。「個」の発見または「個」の成立は人類史上の成果物だと思えます。しかも大変な苦難(大変な受難)を経て、また、人の生命について試行錯誤を経て部分的に手探りでやつと気が付いたものではないかという感じもします。しかも、このような歴史的経過があつても決して固定的、決定的なものではなく、たとえば戦争や民族紛争などで観られるように、いつ崩壊があつても不思議ではない、脆弱でたよりないものかも知れませんが。

人間の生き方と同様に、文化や芸術にも同じことがいえるのではないかと考えています。たとえばエジプト時代の絵画や彫刻に現代人とは違った世界観があつたのではないかと考えられます。現代人の理解や認識はそれらによる歴史的経過を認識して重層的に積

み重ねてきたのではないかと。たとえば絵画手法で遠近法が発見されたことによつて新しい表現が可能になったことや、光やかたちを表現する上でそれらのみならず作者の思考まで盛り込む手法が試されてきたことなどです。同時に特権階級の秘蔵だったものから、民衆に公開される時代に移り、展示方法も問題になったことでしよう。作家は作品を媒体としてより効果的に効率的に相手に伝えたい、その努力は現在も続けられていることでしよう。

作品を展示してご覧いただくことは、長年培ってきた文明的枠組みを無視することはできないのではないかと、思います。名札なしの展覧会ではないかと「制作者の名前がないのではないか?」の論議に発展しているのではないかと、そのように考えています。

## 自然か文明か

作品を制作するのは余り文明に影響されていられない人々たちによる、自然であることに立脚した作品がエネルギーの溢れた迫力あるものになっていると思えます。その作品を文明の成果物である美術館や他の展示場にご来場いただき、失礼なくご覧いただく展示はやはり文明の蓄積に沿った扱いがあつてはじめて展覧会たりうるのではないかと思えます。「名札などいらぬ、わかる者にだけわかつたらよろしい」とそういう観点に立つなら、美術館も展覧会も必要のないのではないかと。文明の成果物として展覧会にやつてくる観覧者にきわめて失礼ではないかと。そう考えています。

(二〇〇七・二・二)





＜メニュー＞  
 マーメイドサラダ  
 シシボタージュスープ  
 ホールキャベツ  
 プリンもも焼き  
 ガトーキ

クリスマスといえどシマンメリーチキン!! ケーキは毎年変わらず出てきますが、他のメニューは毎年違っていろいろです。今年はキャベツと白菜がたぐざれあり、このメニューになりました。ホールキャベツは、落穂では6年ぶりに出たそうです。(驚)  
 また、シーザーサラダに入っていた白菜は、白菜の美味い中の部分だけしか使っていないという手の込みよう!! (ぞろぞろ☆)  
 皆様、お気に召していただけたでしょうか?

### ★レストラン・OCHIHOU★



### ♥落穂建設(株)♥

今年のポイントは、雪の結晶の飾りと電飾をたくさん使った事です。昼間には、サンタやトナカイ、雪の結晶の楽しい雰囲気、夕食時には電飾のあたたかみぬくもりのような雰囲気を感じてもらえたいと思います。年に1回のクリスマス☆思い出しに残るような演出を心がけました。



♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪  
 オチホに  
 サンタがやっ来て!  
 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

1/365日だけ

落穂寮のクリスマス：☆クリスマスという日は1年365日の内の1日。たかが1日、されど1日。そんな「1日」を大切にしようじゃないか!!!  
 『素敵な1日を過ごしてもらいたい、一緒に楽しみたい、皆で一緒にニコニコしたい。』  
 そんな思いを胸に、各担当ごとにクリスマスの一ヶ月程前から頭を悩ませているのです。  
 今回は既にご覧頂いた通り、各担当毎の代表職員にインタビューを行った際の記事を掲載させて頂きました。いかがでしたでしょうか?  
 この広報を読んで下さり、「私もオチホダンサーズに!」「我こそはオチホダンサーズに!」「自分はオチホ建設に!」などと言って下さる方がおられれば嬉しい限りなのですが、職員一同、両手を広げてお待ちしております。  
 しかし：やはり行事って大切なモノですね。寮生さんの笑顔を見ても職員皆、感じていることです。寮生さんの素敵な笑顔の為に、そしてなんとなく過ぎ去ってしまう「季節」というモノを寮生さんに分かり易くお伝えしていけるひとつの方法として、今後もひとつひとつの行事を大切にしていきたいな。そんな風に改めて感じるこの出来たクリスマスとなりました。  
 サンタさあーん! 来年もあなたの来寮を心からお待ちしております♥

# 2006年のクリスマス会

ジングルベル♪ジングルベル♪鈴が鳴る☆今日は楽しいクリスマス!! へい会12月24日、待ちに待ったクリスマスが行われました。天気は晴れ交朝から寮生さんたちや職員はドキドキワクワクな気持ちでした。

## プログラム

- 1部
- 1. 寮生による漫才
- 2. ダンス
- 3. おやつ
- 4. 音楽
- 2部
- 5. ディナー
- 6. サンタさんからのプレゼント



大変な事になりますよ

なんでやねん!!



★ちびっこサンタもやっ来てくれました

このクリスマスにあたって職員たちは準備や練習をしてきました。その見どころ、こだわりなどをインタビューしてきました。



### ♥オチホダンサーズ♥

今年も歌だけにとどまらず、小芝居・踊りも盛り込んで!! と盛り込んでも、大変だったこと言えれば、やはりまずは選曲。「どの曲にすればいい、ノリノリな感じになるだろう?」と頭を悩ませました。  
 当日は大盛り上がり!! ともうれしかったです。



今年も2つのダンスも披露させて頂きました。まずは振り付けを覚える為にビデオの回を何度も見たり...。そして練習となるのです。これこれ1ヶ月前から夜は夜な夜な練習、夜遅くまで手は抜きません!!  
 より楽しいクリスマス会を... のために私達はダンサーズ!



### ↑WELCOME, サンタさん↑

皆さん、素敵な笑顔! サンタさん、というよりはサンタさんの抱える大きな袋に視線は行っていきますが... (笑)。  
 「いいな、いいな...」  
 と、職員はいつも指をくわえてながめているのです。



### 野洲北中学校交流会

昨年十一月八日に野洲北中学校の生徒さん四名が、体験学習という事で来寮されました。当日は天気も良く、午前は歩行へ出発、午後は二つに



▲つくし班とミュージックケア

とつに入れてもらえたらと思っ  
てしまいました。今後、どん  
どん受け入れたいと思いますの  
で、よろしくお願いします。

別れて竹班と共に寮内の環境整備に取り組み、つくし班でミュージックケアに取り組みでもらったのですが、初めての体験にもかか



▼竹班と外作業



わらず積極的に寮生さんと関わりを持たれ、活動にも意欲的に取り組んでおられた姿勢に、職員も喜んでいました。ぜひ、将来の進路のひ

### ネーミング!

毎年、サンタクロースのように、十二月になるとプレゼントを持って来て下さる方々が、十二月九日に落穂寮に来られました。そう、NECライティンク労働組合・NECSCHOTTコンポーネツ労働組合の皆さんです。さて、この素敵なプレゼントのネーミングがとても洪いのですが落穂寮では「ランプ交換」と呼んでいます。今の若い職員からは、今時「ランプ」なんてと、その名前に違和感を覚える意見も聞かれるのですが、今から二十年以上も前に始められたこの暖かいプレゼントはその名前からも歴史と暖かさを感じとることができると思います。これからも、ずっと、ずっと、暖かいおつきあいをお願いします。



▲ NEC 労組の皆さん。全員集合!

### 泉

▽自立支援法が施行され、落穂寮も新体系への移行に迫られています。福祉の現場で「サービズ」という言葉にやはり抵抗を感じ、福祉の思想、心をどのようにして伝えればいいのか、制度の変更が心の変化につながらないよう、気を引き締めていきたいと思っています。

▽今年度は、とても動きの激しい年でした。福祉を取り巻く社会もそして寮内も。これまでなら、そんな時は寮生さんも落ち着かず、かなり荒れ模様になるのですが、加齢によるものなのか、職員の力の成せるワザなのか何とか乗り切れそうです。新年度も、皆さんのお力をお貸し下さい。よろしくお願い致します。

### ことば

木 ことば  
もう春なのか、まだ冬なのか。夏だったのか、秋だったのか。私を取り巻く環境が何だか変わった。

何を目安に活きればいいのか？誰をたよりにすればいいのか？それを信じていけばいいの？変わらないものなんか、あるわけはないけれど、私が信じる心は、いつまでも変わらない、と私は信じています。